

魚の群がすごいよ

犬を見たけりや干潟において

ふかんどび

オ401号

1989.8.9

谷津干潟愛護研究会
〒250 習志野市谷津三一二五-11
電話〇四七四一五〇四四
文責 森田三郎

会費年2000

創立
1974.12.9

まるで、ドッグウォッチング

とにかくまあ、干潟に行くと、
いろんな犬が散歩に来るよ。
プードル、土佐犬、シバ犬、ブル
ドッグ、コリーとTCと、
犬と犬の名前は関心ない。
草むらのベンチに寝ころぶか
ただでいい。顔見知りの人、
犬も多し。

水の底はハゼだらけ

みなさん、近いうち機会があ
つたら、東側水路の出口の水
底、あるいはミオのふちをの
ぞいて下さいよ。

ハゼがメチャクチャにいる。
まさにハゼだらけだ。ちよう
ど無数のハリを置の上にはば
らまいたように、黒いハゼの
姿が水をすかしてうごめりて
いるのが見える。
これだったら釣り針を、そ
こを目かけてたらせばいい。
ハゼはどちらかというと、余り

犬にも、伝言板というか、通信箱
というか、連絡帳みたいなものが
あるんだね。流木の柱やベンチの
脚に、決まてくんく包みをかいて、
片脚を上げて小便してしく決った
のがある。「包みの書きおき帳」。
犬は納得した顔で歩き去る。
干潟の自然環境が保全さん、
散歩、ジョギング、昆虫や植物
観察なども出来るようになってくれば、
市の歴史の新しいページだ。

利口じゃないから一パツでくらり
つくだろうよ。あるいはモリで
ぶっ刺しててきい。
こういう光景を10月の初め頃
までだ。それ以上大きくなると、寒
くなる為、沖の深所へ行つて
しまう。

ハゼやイナの群は、上げ潮と共
にやってくる。90cm四方の四ツ手
アミを、腰まで水に入り、7、10
分そのままにしておく。水の中の
足に魚が、トシとか、コチョコク
とぶつかってくるのがわかる。
やあうよっこいしよっとアミを
引き上げると、30、100匹入っている。
天ぷらにするとオイシイよ。

証言 私の履歴

□22□

習志野市谷津三丁目の公園アパート、マンション、住居群がびっしり立ち並ぶ中に、四角いプールのよろに、ぽっかりと空いた小さな海。縦五百尺、横一千尺、面積四十一畝。二本の水路で東京湾と結ばれている。

なごは、何もできないでいる自分が情けなかつた。夜、寝床で天井の木目を見ながら涙がこぼれた。決心した。

ゴイサギ、ヨシガモ、イソシギ、シロチドリ、ユリカモメなど主な鳥類四十二種。渡りのシーズンには一万余羽が飛来する。ゴカイ類、貝類、カニ類などの底生生物やボウ、ハゼなどの魚類がすむ。

たった一人の闘いがはじまった。朝刊を配達して食事を済ませると、バイクで干潟に向かう。ぬるぬるするヘドロの中に脚まで埋まる。素手でこ

の子は卒業してしまつた。恋文を書いた。毎日一通ずつ投かんした。ものごき郵便配達がまとめて一日に四、五通も届けたらしい。一月後、菓子折りを持った彼女の両親が新聞販売店にやってくる。「うちの子はまだ娘ですから」と丁寧に、しかし断固とした口調でこたわつた。

これをいさえずればいいんだ、と自分に言い聞かせた。いつか干潟を見直してくれる社会に変わるかもしれない。その目までは、自分の方から決意をつけてはほしまいだ。

四角い海

ごみとたつた一人の闘い

昭和六十三年十一月二十九日、環境庁自然環境保全審議会が国営鳥獣保護区に指定することを決定。干潟は残った。

大学生のころ、女子高生に恋をしたことがある。駅前の喫茶店の窓際から、十五秒間だけ、改札を通過して帰宅する彼女の姿を毎日見つけた。やがて、その時間になると、テーブルには「予約席」の札が置かれるようになった。九二年、「好きです」のひと言も言えずに、そ

黙々とごみを拾う日々が続く。この闘いは勝たなくてもいい、持ち

拾い上げたごみを事務所所長室のじゅうたんにおちまけたりしたほどに険悪な関係だった。埋め立て側の県企業庁とも、「手打ち式」ができた。協力してくれる人がほしいに増えた。五十五年、ごみ拾いを「谷津干潟クリーン作戦」と名づける。

その十四年前の四十九年、森田三郎さん(現在は市内の新聞販売店で住み込みのアルバイトをしていた)ある朝、「埋められゆく谷津干潟」の大見出しが目にとび込む。

こんなことで干潟はきれいになるのか。なつたことごとく、本当に埋め立てられずにはいられないか。いつまで続くかわからないが、生活していけるか。年だけは確実にとる。体力も衰えをきたそう。とにかく、十年間は何か考えずに続けよう。十年後、だめだったら、あきらめればいい。

夕刊を配った後も拾い始める。雨の日も雪の日も、毎日続けた。流木やタイヤは体にロープを巻き付けて引っぱる。たんすはパーベルで細かく掘りつけて、少しずつ埋防まで進ぶ。

月明かりの下、徹夜でごみをすくろ。目が慣れれば、くきが一本落ちて

写真の朽ち果てたクイの並び方に、見覚えがあった。小さいころ、日が暮れるまで遊んだ「谷津のふかんど」だった。たまらず、干潟に走った。タイヤ、墓石、生ごみ、建築廃材、豚の骨……。そこで見たのは、奥くて汚いごみの山だった。イルカ、ウミガメ、トビウオが泳ぎ回り、潮干狩りにきわった、あの海が、ごみために変わっていた。好きで汚くなつたんじゃない。汚したのは人間じゃないか。それなのに、奥いから埋め立ててしまえ、なんて、

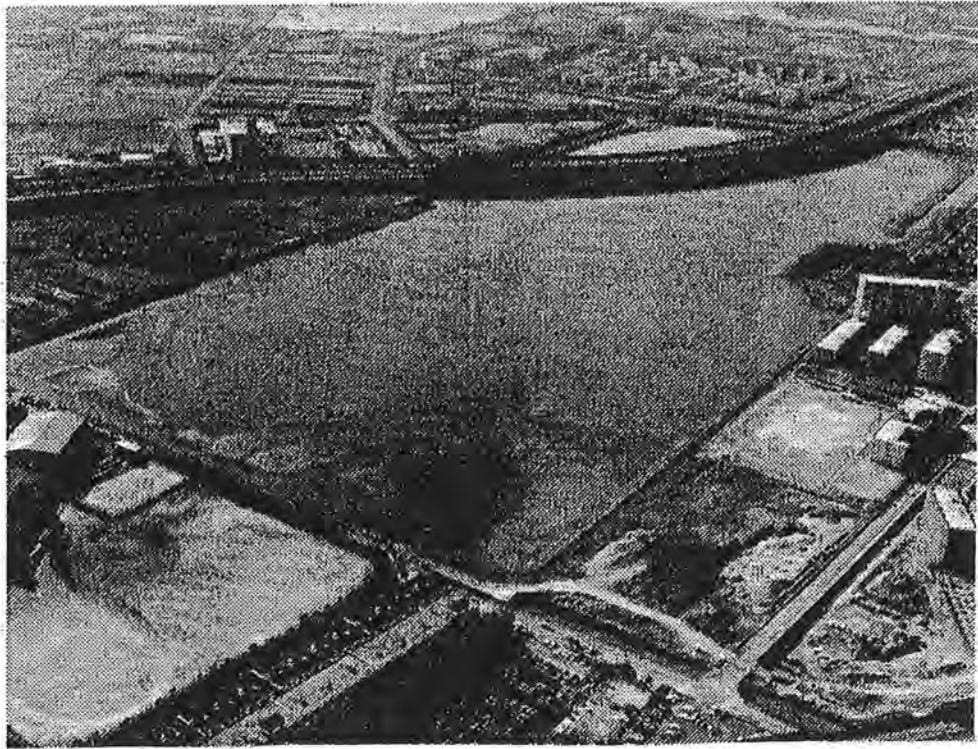
なんとか、「ふかんど」を取り戻さ

いたもわかるようになった。疲れると、堤防の上で死のように寝た。交通事故で左足を骨折した。退院したその日から、ギプスのまま松葉づえをついて、ごみを拾った。手の指から指紋が消えた。

大蔵省の「普通財産」だった谷津干潟は、県の埋め立てラッシュユからかるうじて生き残った。コンクリートに囲まれ、高速道路の下で息づく小さな自然は、開発とは何かを鋭く突きつける



「私を支えていたのは、子供のころ遊んだ遠浅の海の思い出。昔の海は、これからだって、もう絶対かえっては来ないけれど」。森田三郎さんは言う。「いびつな格好で残った干潟の姿は、いままで私たちが何を考え、何をしてきたかの象徴だと思ふ。次の世代に語り継いでほしい」



大蔵省の「普通財産」だった谷津干潟は、県の埋め立てラッシュユからかるうじて生き残った。コンクリートに囲まれ、高速道路の下で息づく小さな自然は、開発とは何かを鋭く突きつける

谷津干潟、それ自体が絵言葉で書かれた現代社会の、私産の環境の「証言」である。

六十二年十一月一日、習志野市谷津で、朝日新聞社ヘリコプターから

若さはバカさだ (右の記事から)

前ページから続く

七年目。習志野市に転居。アパートを借る契約書に「無職」と書き込んだ。貯金も底をついた。そんなある日、ごみの底から手のひらほどのきれいな砂が見えた。まちがいない。子供のころ裸足(はだし)で踏んだ、あの「ふかんご」の砂だ。両手を砂の周りにつき、はじめて干潟で遊んだ。砂の範囲は日に日に広がり、「ロカイヤカニ」が姿を見せはじめた。海の色が変わってきた。



昭和三十六年頃の谷津干潟。沖合三丁目まで浅瀬が広がった。現在の習志野市谷津三丁目

← 左の子真は、今の谷津三丁目前、バラ園寄りから、新習志野駅方面。

ラブレターの娘の母から電話が来た

この記事が出た次の次の日の夜である。「あのう、森田さんでしょうか。〇〇です。まだ娘のこと、憶えていてくれたんですね。

「はあ、ええ、まあ」だけの私。このお母さん、市内に住んでいる……。

ありがとうございます。いつでもやお世話になりました。ええ、娘も今は結婚して、子供も二人おります。でも、みなんで応援しておりますから、これからはお元気で……と。

この色紙は、ちょっと古いけど、選挙のあった昭和62年の4月、当選祝いに頂いた。この子産も今は中学1年生。ひと通りの社会人になった頃、谷津干潟もどう思うのか？

感謝状

ありがとうございます 森田三郎

あなたの愛で、自然や鳥たちそして何よりも私たち人間に憩いと安らぎも与えて下さいました。

これからも愛と勇気を持ってあなたが燃え尽きるまで地球の大そうじに力を注いで下さい。

昭和六三年三月十五日

橋田 早川
島貫 藤原

市議会議員
とうせんおめでと
とうございませす
(鈴木誠)

おめでとうございます
おめでとうございます
(長谷川姓)

おめでと
おめでとうございます
(鈴木龍次)

おめでと
おめでとうございます
これから市政のクリ
ン作戦がんばります
(ヤ) (ト) (コ)

天才森田と
市議会議員

夏の夕方の干潟はゴールデンタイムだ

ふむんぼ

オ402号

1989.8.18

谷津干潟愛護研究会
 〒25 習志野市谷津三二五十一
 電話〇四七四一五一一五〇四四
 文責 森田三郎

会費 年2000

創立
1974.12.9

とくに、こみからはようである。

時間にして、4時過ぎから日没近くまで。

「ただ見つめ、黙って、想つて、休ばいい、いい、他なし。」

ああ、今日も終わった。暑かった。ドサクサしていた。で、今はこうして静まっていくんだなあと思う。

さう、草むらではコオロギが鳴っている。秋の渡りも始まり、その声か、ピーッ、ピーッ、とひびきわたる。

夏雲の形はまだくっきりと残っているとはいえず、いくぶん赤味がかって、ホッとしているというか、くたびれてしまった。

今日はメダカの池にオンジョもいたけど、ほんと久しぶりにドロボーがすばらしいスピードでヨシ野の上をとんでいった。

そうじきすまそスキも咲くし、山ではカラスうりやトングリもなつんだなあ。

子供の時、山田の中の一本足

のかかし、いしたとて歌うて、カラスウリのからまるクリの木の下にあった、あのお地蔵さん、どこいったんだろ、なあんにも今はない。ゴミとコンクリートと排ガスとドブ川だ。ふささとして、何だべえつ、夏の夕方の干潟は、子供の日々、あの遠浅のうみや野原、夏の草の晩歌だ。みっくんをなした。思つて、動つて、こころやつてあること、みんをなす、みんをなす、だから元々も出せ、いつともう思う。

あんまり

心配するな。有頂天になるな。

こころやつて心

臆が動いていただけで有難いじゃないか。



おたん生日 おめでとうございませう。
 これからも体に気をつけて谷津干潟を歩かせて下さい。
 谷津干潟のゴミは旧のゴミは必ずしもいじり
 つか? ゼンに森田さんか好きは食べ物をあし
 えて下さい。こどもいいは? 虎ん
 にいます。
 菅原あやみ

私の誕生日(7月7日)に、菅原綾子ちゃんから頂いた。

時の流れを感じます

かつて、「おじちゃん、何しゃってんのお？」なんて、パンティ丸出しにしてしゃがみこんできた。

「うーん、ほら、ぬ、ゴミ拾ってんの。あぶるしよ、でも、カニといてよ」と私。

泥だらけの私のそばで、その小さなもみじの手のような人差し指で、土くみを引っしようけんめい、いつまでもいじっていた。

「はい、カニだよ」と見せると、あわてて両手を引っこめて後に

同じ夜の仕事でど

「小学校のそばのKさんです。迎えに行ける車輛ありますか?」と、無線係が流している。

お客さんがタクシーに乗ろうとして、会社に電話したのである。すると無線係はすぐ、ハト交匯の全車に流して応答をする。そして、最も近い所にいる車が、「ハイ、何号車行きます、現在位置どこそこ、何分してマイクで送る。それは受話器のお客さんにも聞かせています。」

このKさん、おじみである。近所

まわってしまった。そして砂の上をばって行くカニを、その小さな目をまんまらにして、じっと見つけていたっけ。

~~~~~  
「それがまあ、今はどうですか、ええ。口紅つけて、カカトの高けえのはいて、あんなんだか流行だか知んぬえけい、いかにぞ、私コレ着てますのよ、なんて服でさ、バッグ持つてビョコく、歩いてらっしゃる。」「こんちやあ」と言うので、ほんのかすかに、ケチな位の反応を示す。まあいいじゃないか。イッテラッシーヤイ。

の人で母子家庭。離婚が死別かは知らず。夜8時頃いつも電話かくる。夜の仕事に行く為だ。私か近くを走っていたので無線を拾った。

冬の雨の日。家、借家の前で車を止めて待った。「はあーい、お待ちよおさま」とKさんが来た。メーターを倒し、ドアを閉め、走ろうとした。そこに、子供、まだ小さい。「お嬢ちゃんよあ、行かなくて、行かなくてよ」と泣いて走って来た。後を追って、近所のおばさん、「Kさん、うちのよといっしょに、テレビ見させて寝かすから行ってらっしゃい」と子供を抑えた。

「行っていいですか?」と私。「ええ、いいよ」とKさん。この日、タイヤの音だけが耳に響いた。

# ふかんど

ア403号

1990.8.15

谷津干潟愛護研究会  
〒276 習志野市谷津三二二五十一  
電話〇四七四一五〇四四  
文責 森田三郎

会費年2000

創立  
1974.12.9

「どろんこサブウレが出版されてから半月程たった或る晩。子供の頃にいつしよに遊んだ人から電話がかかってきた。

松本賢二という、私も住んでいたワラビき屋根の大家の子供だった。私のようにワルではなく、むしろ私のイタズラを告げ口する方だった。

ひとしきり本の話や子供の頃のことを話してから、家のことへと話は移っていった。

ワラビき屋根の家は、どう大分前にこわされていた。それは私も知っていた。そこを引起してから30年、なつかしいこともあって、何かの時に近くに行った時、何回かそ

幹や枝の曲り具合、その位置は今でもけっきり憶えていて図にかくこともできた。

キャンデーやおすびも、苦労して持ってってペン近くに登り、よく喰っていた。とにかくうんまい。

悲しい時、上で泣くと、その後で天気が出てきた。嵐の時、ゆさゆら小方から大声で歌うと、そのすごく勇敢な気分になった。

こと、その周辺を見に行っていた。

「サブちゃんよお、こんどおれんち来いよ。新しい家作ったんだよな」。「へえー、で、そこに榎があって、よくみんなで見えたよなあ」。「ああ、あなかあ、実は、じゃまかって言われて切っちゃったんだよう。境のことをあつたし、葉っぱが落ちてきたわ覚えてたよなあ」と。

3、4日の後、ククシーの時に行ってみた。切られていた。切り株だけが申し分け程度に残っていた。そしてすぐ隣に、白っぽい二階建のしゃれた大きな家が、いやに真新しく建っていた。

広い干潟の見える大きな榎と、そのすぐ下のまわりにあった、椿などのこんもりとした木々のかたまりもなくなっていた。その暮方は、いんちやセミ産の幼虫がいて、次々と産まわっては夏中大合唱をしていたっけー。

たとい、榎があったとて、あの広い遠浅の海はなにし、見えないう。梢にとまったオンジョ、ドロボー、ヒラキ、アカチンといなり。フリくと飛び交うゴマダラチョウ。真夏の陽をうけてきらくくと光るやわらかくとんだタマムシといなくなくなったから。

アカチンが目の前の梢をフリくと飛ぶ頃、遠くからサーカスのジンタが流れた。



「おばさん、たのむっ」

フリ銭のことである。一円札、私のタクシーの売り上げは、まあその日によって違うが、大体三才から四才円である。

朝に在庫する時、十円、五十円、百円、五百円玉、そして千円札を用意していく。

問題は千円札である。一円札札を出す客の為、私としては一応二十枚から30枚を財布に入れておく。タクシーという仕事柄、あまり大金は持ちたくないので。

今は自動販売機でも千円札を使えるので、「玉」は途中で補充する。

一円札の客、出た時はたて続けに出る。その他五千円と。五、六百円で平気で出す。

昼間はまあいい。問題は夜、深夜だからその為に、昼間から千円札を作っておく。市内何か所かに、タバココみ、あるいはくずしてくゆる顔なみを決めてある。その店の味がまづかろうが、無愛想だるかかまわらない。札を切らした時、とびこんで「おばさん、たのむっ」でできた所せ。

アルミ缶を拾って

ます

今度、アルミ缶を拾い始めた。でど、やっぱり、ちよっとははずかしいなあ。

地元の小学校の、オーケストラの楽器の修理代のタシにでどと思つて。道路、草むら、空き地、そしてゴミ箱やくずかごの中を、ごそく／＼と。

とくに道路ばたは、袋を持って下を見ながらキョロ／＼と、あちこちとほつき歩みながら、行きつ戻りつう／＼と。

ドライバーがみんな見ていくんだよ。これが、谷津干潟だったら、べつにどうってことないんだけど。

そんな時思う。「ああ、またまたオレのゴミ拾い哲学は本物ではないんだ」と。

このアルミ缶を拾うまでは、とつとちゃんとした信念を持っていたはずだと。ところが、そういやなかったのだ。

ゴミ拾い、否、アルミ缶はゴミではないんだが、場所が変わったからといって、こころしてははずかしいと思ろようでは、まだ修行が足りなかったのだ。よし、ガンバロー。

# ふかんど

№404号

1990.8.26

谷津干潟愛護研究会  
〒275 習志野市谷津三二二五十一  
電話〇四七四一五一一五〇四四  
文責 森田三郎

会費 年2000

創立  
1974.12.9

## 夏は貧乏人の天国

とは、我が母上の言葉。私は子供の時からそう聞かされ、そう育ち、実感と体験からそう思っていた。

ある時、「かあちゃん何でだつ」と尋ねたら、「だってそおだべよ、暑しからよ、着るもんいぢねえからよ」と、度々の答え。クーラー断固拒否の我が家。(無なんてくやし)から拒否、我

か家とはいつとも雨どりのする木危借家。風呂場や玄關にカニも来ているし

ところで、さすが一日5、6回水浴びると、案外疲れますね。家に帰るするの一番は、とにかく開けらるる所のものは全て開け放つ。どのすぐく温かいエアが充満している。網戸がある干潟に面した方から、網戸がなり玄關へ風が勢いよく吹き抜ける。蚊も吹き飛ばされて部屋には入来まい。すかさず着物を脱いで、頭から水をぶっかけること。

## 真夜中の干潟を

ただるんとなく見ただけ。タクシーの仕事が終ったの帰る途中、ちよっと遠まわりして寄っている。時間にして午前二時から4時頃。

そんな時間に干潟を見たかどらといって、特別なものはるんとない。そうは知ってと、そんなとなく見つめ、ほんのひととき見ていただけ。

最後の客で、遠く走りをした時など、高尾道路のインターを

降りてそんなま行く時とある。缶コーヒーを飲んでタバコを小かし、ソッと静かに、ぼつんと見ている。夜景がきれいだ。マレニヨンヤビル、街灯の明りが水面に映っている。ずい分明りが増えたなあと思う。

カモやウミネコ、サザの音が唐突に聞える。でど、やっぱりいちはんいのはシギヤチドリの声である。潮が半分ぐらいの時、ソカにも寝静まった夜の干潟という感じがする。今日一日のこと、そして今までのこと、みんなきれいにしてくゆるようだ。さあ、早く帰って寝よう。

クーラーなんて、南蛮渡来のバテレン仕掛で暑さをかきすのはやめ、正々堂々と夏を味い、ドクドク汗をかこう!?



# 干潟のハゼを食べてみた

## 谷津干潟を喰う

テンプラで。見るだけか能ではるり。舐め合りの尽きるところ、よめはやはり味覚、喰ってみることだ。

確かTV朝日の取材、「拙占、女の60分」の時の場面である。字直は昨年の今頃、8月であった。なにして四っ手綱でかっぱり、20、30匹のパンにとれる。この日、と、トヤ／＼とパケシー杯ぎっしりと。食べきれなくて困った。中村さん、白井ゆき子、川島さん、佐藤さん、森田。あずま屋、いとしぎの涼しい日陰でパク／＼と。な、汚なくないよ。でと、首をぶった切るめは、とよと、とかわいそうだった。



## お前、谷津干潟をやらっ

振井英行君(中二)とどう一人の級、夏休みの研究テーマのこと。

夏休み前、宿題の研究を各自が決めた時、担任の先生が振井君のところへ来て、「お前、振井、お前は谷津干潟をやら」と言われたとのこと。

彼は私に、「先生はさ、オレが干潟によく行ってたこと、そしてクラスのみんなと知ってたよ」と。炎天下、潟スキーヤ水の中での彼。ほんとにやっせんのかしら。

### 短歌

谷津干潟

十六一十四 秋山周子

ハイウェイと高層団地の街中にとり海の名残りの干潟  
光体となりて群れ飛ぶシロチドリ春の中空愉しがるべし  
シロチドリ群れ舞う彼方宙という果てなく続く青さを思う  
丸太ん棒押して干潟の芥拾う幾人が見ゆ休日午後  
谷津干潟クリーン作戦ボランティア募る看板色褪せて立つ  
巾狭き水路をのぼりくる潮埋立ての街ふたつを越えて  
二筋の水路が四十ヘクタール守れば憩うハマシギの群  
胸篤く読みかえしおり十余年ひとり干潟に塵芥拾う記事

（袖ヶ浦六丁目会報  
第28号一九九〇、一）

# ふがんど

第405号

1991.8.10

谷津干潟愛護研究会  
〒275 習志野市谷津三二五-11  
電話〇四七四-5115〇四四  
文責 森田三郎

会費年2000

創刊  
1974.12.9

## 「ゴミ問題」を考える——干潟クリーン作戦

市議会議員  
タクシードライバー  
森田三郎

これは、谷津干潟クリーン作戦の、私の心象と行動の一部である。

行動しながら思ひ、思ひながら行動してきたことを、なんとかまとめたもの。整理された方針や理念ではない。

### 「ゴミを捨てるな」

「ゴミを捨てるな」。こんなことは誰でも知っている。わかっている。で、そうするか、あるいはできるかといったら、それができないのである。

今、ゴミが大きな社会問題となっている。でもそれは、実は簡単なことなのである。つまり、「こうしてはいけない、ああしてはいけない」と、理屈ではみんなわかっている。ちゃんと頭では知っている。ところが、行動を伴わないのである。つまり、知っててできないのである。もし、ペーパー試験をやったら、一〇〇人が一〇〇人とも、ほぼ満点の成績で答がかえってくるだろう。ところが現実には、できない。やらないのである。なんのことはない。小学校低学年の子供でもわかることが、人生経験の長い、立派な大人のおじさん、おばさんができないのである。

### 大人がやらない

なんてたってかかってたって、いくら偉そうなこと言っただって、大人がやらなきゃダメだ。要は、それだけのことである。やらなきゃダメだ。私たち大人がやらないで、いくら人に、とくに子供たちに、ああだこうだと理屈をまくし立ててもダメだ。役に立たない。

なぜなら、大人がゴミを出しているんだから。バカバカしく安くゴミを投げ捨てるんだから。大人が、後姿で、背中で教えてるんだから。その後姿を見て育つ子供が、やるわけないじゃないですか。なんで、やるもんですか。

子供たちにとっては、自分の身の回りのすべて、森羅万象のことごとくが、そっくりそのまま「生きた教科書」である。これはこうだ、あれはあれだというふうには、目に入るものすべてが、生きた「絵ことば」である。メッセージである。ま

たサインである。残念ながら、そんな中で、学校の教科書にいくら立派なことが書いてあったって、教えたって、この現実社会の中で、勝ち目は少ない。もし子供が、教科書をはじめ、大人がそう教え、話したように育つんだら、この社会、英雄豪傑聖人君子に満ち満ちている。そうになっているはずだ。ところが違う。

### ゴミの言い分

私は、ゴミにも言い分があると思う。まあ、もしゴミにも心があり、言葉があるとしたら……。

たとえば、いま原稿を書いているこのボールペン。インクがあつて、使える時はほとんど使わう。それで、インクがなくなつて書けなくなり、その用をなさなくなると、ポイッと捨てる。つまり、ゴミと称するモノになるわけだ。ゴミの誕生だ。でも、このボールペン、物質的、科学的にはなんら変わったわけでもない。用をなさなくなつただけだ。役目が済んだからもういらぬよ、というわけだ。なにも腐つたわけでも、モノの性質が変化したわけでもない。人間にとってその働きが終わつただけである。「機能的なゴミ」なのだ。機能的ゴミといえ、私たちの身の回りになんと多いことか。

例をあげよう。ビニール、紙袋、新聞紙、チラシ、雑誌や本、コピーの書類など。典型的なものは、一瞬のうちにゴミと称される。アイスクリームなど、それが包まれている時は、製品として陳列してある間は誰もゴミと言わない。が、誰かが買って食べようとしてその袋をとる。そしてポイッ。この時私たちはそれを指して「ゴミ」と言う。いわゆる、モハはそのまんまだ。「役がら」としてゴミにされたのだ。

ゴミの方からすれば、大いに言い分があると思う。文句もあろうし、くやしかりう。あまりに一方的だし、使う人間のサイドからだけしか見ていない。自分の都合だけのものの方である。そして、そういうゴミがたくさんあると、人は「きつたねえ」と言う。まるで、その「きつたねえ」のが、ゴミのせいであるかのように言う。ゴミが原因で、ゴミが悪いみたいだ。

ところで、いったいこの世界のどこに、「汚ない所」、「くさい所」、「よごれた所」なんていうのがあるのだろうか？否、本当はただ、「汚なくされた所」、「くさくさされた所」、「よごされた所」があるだけなのだ。なんで、海や川、林や草原などが、自ら好き好んで汚れるものですか。それに、私たちが住むこの町にだってそうだ。悪い原因は人間であつて、ゴミではない。

### 訴えが抽象的だ

「町をきれいに」とか「海をきれいにしましょう」という声、あるいは看板を見る。それはそれでいいのだが、ところでど



うだろう、もつと具体的、直接的に訴えては……。なぜなら、ゴミを捨てたりよこすのは、具体的直接的な行動であり、行為だからだ。こういうふうにしなければならぬ。「出すな、投げるな、捨てるな、持って帰れ、そして入れる所にちゃんと入れろ」と、こうでなければならぬ。くずかごを置き、そばに看板を立てるのであれば、「きれいにしましょう」ではなく、「ゴミはこの中へ」とするべきだ。ゴミを持ち帰ってほしかったら、「ゴミは自分で持ち帰り下さい」と。

「美しく」とか「きれい」というのは、「標語」としてはいいかもしれないが、ではそのために何を、どうしろというのか？ 私たちの心の底には、そういう潜在的な大衆心理がある。たしかに、「投げるな、捨てるな」よりも、「美しく、きれいに」と書いた方がなんとなく上品で、恰好も印象もよい。だが、現実問題、今の状況の中で、これで太刀打ちできるだろうか。結果は言うまでもない。できない。勝ち目はない。わかってもやらないんだから……。

#### 骨太に、本腰を入れる

右の言葉の如し。個人も企業も社会も行政も取り組みが足りないのである。とりわけ、学校教育の中へ、がっしりと組み入れてほしい。思うに、私たちは今まで、どれほどのゴミに関する教育を受けてきただろうか。まずない。どちらかというと、あまり重要視されてこなかったのである。まあ、意識せずとも軽んじられてきたのである。だが、こうまで、身の回りの、私たちの町はおろか、国内外、自然全体に、地球規模でゴミ・廃棄物に押し込まれてきている状態では、ちょっとやそつとの小手先のことではどうしようもなくなっている。先の、訴えやスローガンのものでは、やりくりがつかなくなってきたのである。もちろん、こうなることは十分予想され、見通しがついていた。わかっていたのである。でも、できなかった。否、「やらなかったのだ」。

無理もない。今まではなんとか、埋めるか捨てるか、隠すかなどして、「どっかへやっちゃえば」よかった。しかし、今、その「どっかへ」がだんだんとできなくなってきた。やりくりがつかなくなってきた。持って行く所、視界の彼方へ……ができなくなってきた。否が応でも、ゴミと鼻を突き合わせざるを得なくなってきた。ゴミになるものを作り出す方が、それを回収し、活かし、解決する方を圧倒してきたのである。今もそうだし、そのギャップは開く一方である。

だから、今ここで、きれいにしようとか、捨ろおうとかいっても、圧倒的に不利なのである。その中のいくつかは、ほんの例外的ぐらいの数の所では、なんとか勝ちを制しているが、ゴミ問題がこうなるまでには、長い歴史といきさつをもっているのだから、これを一朝一夕には変えられないだろう。短期的では勝ち目はないし、解決もできない。

タバコや空カン・空ビン、紙くずからはじまって、もろもろのものを、「ついポイッ」と、投げ捨てるのが「自然」になってしまった。めずらしくもない、圧倒的主流となつていく。個人だけでなく、世の中全体がゴミというものに対して「甘かった」のである。ゴミだけではなく、環境問題や自然保護を、いつかどうにかなるだろうってな具合に、その程度にししか考えていなかったのである。

そりゃそうだろう。空気だつて水だつて、緑や大地も、環境は文句を言わないから。つまり、「環境はタダ」だったの

だから……。そんな具合だから、私たちの町の景観や美観も、もっぱら受け身で、感じたり批評するという意見ばかり。意見のみだった……。

意見。そうだ、それでは、私たちが何の気なしに、平気でゴミをポイ捨てるのも、立派な「意見」ではないのか。行動という形で表わされた、私たちの意識や考えという、具体的・現実的「意見」ではなからうか。私たちの住む町に、社会に、自然環境に対してどのような「意見」を持っているか、その証拠なのである。「ゴミ」ではない。私たち一人ひとりになのだ。ゴミのせいではない。このゴミの問題は、実は私たちの問題なのだ。

環境問題が、ゼニにならない、票にならないというような状況ではダメだ。ゼニにも、票にもなるようではなくてはならない。環境問題、もつと生臭くて、骨っぽくて、ドロ臭くて、血肉化したものでなくてはならない。捨てるのも人間なら、捨てるのも人間である。タバコや空カン・空ビンの投げ捨て、タンやツバを路上に吐くことに罰金や罰則を設けなくてはだめだ。過激だと言うのか。では、車の窓から火がついたタバコを投げ捨てたり、水辺や草原、海や川、あるいは私たちの町にゴミを捨てるのは、その直接的・現実的ながら、こちらの方がこそ過激な行動とは言えないというのか。

子供たちが、空カンや空ビンを持ってきたら、例えば十円を報酬として与えたらどうか。その代金は、私たちの税金と企業が負担するのだ。子供に、金銭という報酬で空カン・空ビンの清掃を購うというのは、教育上良くない、問題であるというのか。では、路上や海岸、行楽地や駅前など、いたる所に散乱しているこの空カン・空ビンの現状は、子供たちの目に何を教えるのだろうか。

道路にしろ、海岸にしろ、いずれの場所においても、誰かが清掃しなくてはならない。もちろんタダではできない。それとも、自分がしなければ、自分の財布からお金を出さなければタダでも言うのだろうか。どれもこれもみんな、私たちの税金が使われているのだ。その時、ゴミをポイ捨てる人も、きちんと持って帰る人も、同じように平等に負担するというのは、不公平ではないだろうか。

捨てる人は、それはいけないことだ、やってはならないのだ、そうしたらどうなるかを、十分知っていて、わかりきってやっているのだ。なにも知能がないとか、そうしなければならぬ理由はいささかもないのに、である。

罰金を設けるとか、捨てたら十円払おうなどと言うと、世の教育ママや評論家からお小言や批判を受けるかもしれない。それはそれなりに一理あるかもしれない、ある程度のことばは私も十分覚悟している。しかし、評論や単なる意見から何が生まれるのか。このゴミ社会の現状の中で、なにほどのことができるのだろうか。

捨てる、汚す、破壊するという、「行動化された意見」が、これほどまであまた出され、具体化されているのに、なぜ、拾おう、きれいにしようという「意見」が、あまりにも少数で、金にならなくて、票にならなくて、具現化、行動化されないのか。

#### 行動せよ

昨年、W・ニコル氏の講演が船橋市内のホテルで開かれた。私も招かれて聞きに行った。氏は講演の中でいろいろ話されたが、最後に、握りこぶしを振り上げて、どんな小さなこと、どこであつてもいいから、「アクション、アクション」と半ば叫ぶように力説していたのが印象的だった。私は共鳴した。共鳴しながらいろんな場面を思い出していた。

千葉県習志野市の谷津干潟。私はここで、昭和四十九年か

らゴミを拾い続けてきた。私が子供の頃は、ここで潮干狩りや海水浴が行われ、ノリやアサリが豊富な遠浅の海だった。しかし、高度成長期に埋立工事が始まり、四方を陸地に囲まれてしまった。それと共に周辺の開発が進み、団地やマンションが相次いで建設され、人口が急増した。

いつしか少しずつ、それもほんの少しずつ、どこからともなく、誰もともなく、いろいろなゴミが捨てられ出した。どんどん投げ捨てられるゴミの量が増えていった。あちこちにゴミの山がで始めた。するとそれを崩し、あちこちに散らしては低くし、またゴミが積まれていった。ゴミがゴミを呼ぶということ、後で体験で知った。ゴカイやカニ、水辺の草など、干潟の地面に生きるものは、上をゴミにふさがれているのであった。干潟が呼吸できなくなっていく。

やがて、近所の住民から、臭くて汚ないからどうにかしろ、埋めて欲しいという声が出てきた。泥や砂が腐り、ヘドロ状になってピンクや緑色をして、ゴミを掘り起こすと悪臭が鼻をついた。臭いから、汚ないから埋めろというのは、それだけをとったら一理あると思った。

高さ四メートルの堤防よりさらに高くなったゴミの山の上から、私は干潟を見渡した。まわりを埋立地に囲まれ、悪臭とゴミだらけの、子供の頃の谷津干潟がかわいそうだった。

野鳥の観察会に参加したり、谷津干潟をどうにか残してくれるよう役所へも行った。何度も干潟のそばに立ち、その現実の姿を見ながら、自問自答した。今の私は、要求したり、お願いしたり、意見を述べたり、あるいは観察しているだけの人間ではないか。見ろ、思え、「もしお前が干潟だったら何をしたいか。身を干潟に置いてみる……」と。他に解決を求め、干潟の現実を嘆いて淋しく思っている自分が、くやしく、いきどおりを感じるようになった。人や世間が、ふるさとの干潟が自分に何をしてくれるか、どんな価値があるかを問うのではない。自分に何ができるか、どんな価値あることができるかを問うようになった。うつぼつたる、地熱のような熱い力のようなものが、涙とともにこみ上げてきた。

ゴミを拾い出した。臭くて汚ないから埋めろと言うなら、きれいにすればいいだろう、という考えであった。

ゴミの引き取りは全て断られた。拾うより捨てる方が圧倒的に多かった。そんな中でも、拾った分だけ減るからと思った。ゴミの投棄は、注意しても、看板を立てても止まらなかった。拾う方と捨てる方のイタチごっこだった。拾っているすぐ隣で投げていく毎日だ。

二年、三年とたつうち、あることに気がついた。捨てるゴミの量が減っていくのだ。私は思っていた。今月一〇〇拾うと一〇〇出す。次の月は一〇〇拾うと、それが九九になる。次の月は九八。さらに続けていくと九七、九六……と、そんな具合に、「差額でかせいだ分だけ」きれいになっていく。その間の、気遣い、売名行為、土人などの、いろんな中傷は、「社会的・精神的税金」だと思ふようになっていた。

今にして思うが、何よりの看板、意見、説得は、行動する後姿、背中にあるのだと。ゴミを出していた人たちだって、なにもその人が特別に悪い人ではなからう。また、あえて干潟を汚してやろうとか、環境を悪くしてやろうかという悪意はなかったと思う。つい手軽で、便利だから、習慣となっていたのだらう。

人の情として、どこの誰かは知らなくても、いつも自分がゴミを出している所で、誰かが拾っている。そうして、少しずつきれいになっていっている。そうであれば、いづしか、心理的に、社会的にブレイキになっていくのだらう。そう思っている。そしていったん、ゴミだらけだった所を、すってんてんにきれいにしまえば、そこにはなかなかゴミ

が捨てられなかった。やればできるということが、わかってもらえたのだ。その現物証拠を見せることができたのだ。

干潟の全周四キロメートルを、いっぺんにきれいにしたら到底できない。が、「クリーン作戦モデル地区」という幅一〇〇メートルの所を選び、そこを徹底的にきれいにしてしまった。そしてその論法で、他の所も押していけばいいと思った。

ダンブやトラックなど、業者の投げ捨ても減っていった。その間、拾って拾って拾いまくっていった。ゴミの山を崩し、掘り出し、たたき割りの、文字通り一寸刻みできれいな砂や泥の面積を押し広げていった。するとその後に、ゴカイやカニ、水辺の草が出てくる。

当初、ゴミを拾うよりは投げ捨てる方が減るという自信はなかった。止まるのもわからなかった。いつまで拾う行為ができるのか。また、拾ってきれいになっても、果たして谷津干潟が残されるという見通しも保証もなかった。

でも、自分の範囲にあるものは、行動と思いでしかないと考えていた。傷つき汚れ、ゴミという重荷を負う谷津干潟の、その荷を軽くしてやりたかった。私は自然愛好家でもバードウォッチャーでもないし、市民・住民運動家でもない。ただ谷津干潟を残したかっただけである。

\*

「ゴミとまち」のこと。こうすればいいんじゃないか、ああすべきだという、それぐらいの意見の持ち合わせは、この私にだって人並みにたくさんある。そんな中で、私が自信をもつて言えることは、自分はこうやってきた、こう思い、そして念じてきたと、そんなことくらいでしかない。総じて、「なんとかきれいにしたい」という、その熱望し続ける力があれば、万能ではないが、かなりのことができると思う。いろんな可能性、方法を捜し、作り出せると思う。なぜなら、ゴミ問題に限らず、他のものもものことも、「やる気こそ、能力開発のフロンティアだ」と、そう信じているから……。

## （県）企業庁へ

ありがとうございます

長年の間、埋立地側に引き上げたゴミを持ち運んでくれた。

昭和54年6月より、あずま屋

「いとしぎ」の前をはいめとして、当初トラム缶の本と用意してくれ、クリーン作戦の際のまですでした。

草地が市に移管され、その役目を終えました。



# ふかんど

オ406号

1991.8.20

谷津干潟愛護研究会  
 〒275 習志野市谷津三二二五-11  
 電話〇四七四-5115〇四四  
 文責 森田三郎

会費年2000

創刊  
1974.12.9

### 水がきれいになった

今年の十月下旬頃だったと思ふ。まだほんの少しの広さであったが、うっすらと緑色が

かったのが目に入ったので、それからうっすらと気をつけていた。どしとしたら、アオサかなんと思っていたが、やはりそうだった。

私が子供の頃は「カワナ」と言っていた。昔は拾って山と積み、干して肥料にしていた。

原因として考えられるのは、谷津の船溜りにタレ流しされていた下水が、津田沼浄化センターに接続され、下水が入らなくなった代りに、より多くの東京湾からの海水が入ってくる為だろう。



写真は津田沼高校前。今までは潮がひくと半ば「ドブ」川同然だった。

場所は干潟の東側の中央部、約1kmの広さにわたっている。

### 今後の対策が必要

場所はベラ園前の、通称「芝生広場」の前面の干潟。せつかくカニヤフナムシの生息の為に石を斜めに置いたかこの有様。

子供が投げた、私産が拾った。このくり返し。しかし、このうち多くは谷津遊園時代からのもの。

管理者の市と対策を考え、もよおの石を引き上げていきたい。



# 整備工事始まる

## 総額148億で

平成3年から5年3月完成予定で、いよいよ工事が始まった。

総額148億とはいっても、そのうち土地代金が多いの約100億で、48億が工事費である。

干潟はすでに、大蔵省の一般財産から、環境庁の行政財産になっていて、周辺を習志野市が、国や県、民間から買うもののである。

干潟は県が、環境庁から委託管理し、周辺は緑地となす市の所有と管理になる。

## 各種の施設と

自然生態観察センター、約400㎡の淡水池、観察デッキ、島の休息地が出来、そして周囲を植え込みのグリーンベルトでとり囲み、中之島の遊歩にして所々に休息所などあがま屋を作す。

観察は、ミエルターにして、人の姿が隠れるようにして、鳥の方からは人面が見えないうようにす。

以上が大ざっぱな概略である。

## 問題点

- 一、観光地化して箱庭的にし、利用を優先して環境を悪化させないこと。
- 二、現在、泥が流出しているが、これを潮の流れを良くしなからいかにくく止めるか。
- 三、東京湾から絶え間なく入ってくるゴミをどうするか。

四、干潟や観察センター等の運営の運営をどのようににするか。これらは今後の課題。

